

正しいテストの作り方～その3

今月は学校の定期テストの出し方について文句を言わせてもらいます。

定期テストの場合、テストの範囲表がおよそ一週間前にでるわけですが、学校の先生の中には、この範囲表の重みを感じていない方もいらっしゃるようです。

範囲表には、単に教科書のページ数だけでなく、出題のポイントや「ここは出しません」という？懇切丁寧な指示が出されています。したがって中学生はこの範囲表をもとに計画的にしっかり勉強すれば、間違いなく高得点が取れるのです。

ところがこの範囲表、テストの2、3日前に変更になることがあるのです。理由はどこかのクラスで範囲まで進むことができなかつたからというものでしょう。生徒は「範囲が減った」と喜ぶケースが多いですが、本来は怒るべきです。

もともと範囲表は、『生徒に1週間前より計画的に勉強してもらおう』ために発表される物であるはずですが、それを変更することは『計画的な』勉強を乱す行為に当たります。「減らすからいいだろう」というものではありません。そもそも最初の範囲表を出す段階で変更の可能性がある範囲に設定すること自体が問題なのです。言い換えればその担当の先生を『計画性がない』と非難するべきです。

しかし実はそれでもまだ問題があると思います。テスト前日にギリギリ範囲まで進めばよいというのはおかしいと思います。本当に『計画的な』試験勉強をさせたいならば、1週間前の範囲発表の時点で進んでいるところまで範囲を決定すべきです。つまり課題の全体像を掴ませて、それに対してどのように時間を配分していくかを生徒に考えさせることが『計画的に』勉強させることだからです。

そもそも数学の公式や社会や理科の重要用語にしても、「前日に授業にやったからもう覚えたね」として試験に出すのはどうなのでしょう。塾で教えていて骨が折れるのは、授業で新しいことを教えることより、その知識や技術を実力として定着させることなのです。数学で言えば正負の数の四則計算やルートの計算などは、もともとの説明は1時間でできますが、定着には1ヶ月かけても身に付かない生徒はごまんといます。

先に述べた範囲を変更する先生は、そんなに多くはありませんが、後に述べた試験ギリギリまでを範囲にする先生はベテランの方にも結構います。普段から生徒に『計画的に』勉強せよと言うからには、先生自身が『計画的に』授業を行い、試験を作って欲しいものです。

3回に分けて書いてきましたが、「正しいテスト」を作る能力というのは、「よい授業をする」「公正で高い事務処理能力」とあわせて、教える立場の者に持って欲しい技術の一つです。私自身も教育に携わる者として、すべてにおいて高いレベル目指して、それらの能力を研鑽していきたいと思います。